

Essay

Sapiarc.com

2017年1月23日(2017-1)

80歳と「がん」

今日、私は80歳になった。80歳は傘寿だが、これは傘の字が八と十を含んでいることによるもので、とくにめでたいことにつながっているわけではない。実際、私は80歳を余りパツとしない状態で迎えた。

私は、昨年12月6日に食道がんの切除手術を受けた。手術は、自宅から歩いていける距離にある国際医療福祉大学三田病院で行った。12月5日に入院し、24日に退院したので、20日間入院していたことになる。手術は6時間40分に及ぶ長丁場で、私の体力の限界を行くものだったと思う。このため、退院してからも体力が落ちており、これまでに経験したことがないぐらいにまで痩せている。体力と体重を回復するよう努力しているが、これはなかなか簡単ではない。長い時間がかかりそうだ。

私の食道がんは、次のような経緯で見つかった。8月はじめに帯状疱疹にやられて、疱疹自体は薬のせいで、比較的短時間で消えたが、その後、体調がよくなかった。これは、服用した抗ヘルペスウイルス薬が身体にも厳しいものだったせいかもしれない。体調がよくないことの原因を調べるため、三田病院でいろいろ調べてもらっている過程で、内視鏡で上部消化器の検査をしたところ、食道と胃の接合部に少し問題があるかもしれない箇所が見つかった。内視鏡検査の専門医にも、それががんかどうかわからなかったため、生検に出したところ、がん細胞があることが見つかった。早期がんだった。これが昨年10月9日のことだった。

私の場合、食道に胃の粘膜がせり上がっていた。このようになった食道をバレット食道(Barrett's esophagus)というのだが、その長さが3センチ以上になることは日本人に少ないと言われている。ところが、私の場合は、そのケースで、そこはがんになりやすいのだそうだ。

はじめ、医師たちは、内視鏡手術でがん部分を削り取ることができると思ったようだが、よく調べた結果、がん細胞はバレット食道の広い範囲にあることがわかった。広い範囲でがん細胞を削り取ると、その部分が狭窄を起こすことが知られているので、結局本格的な外科手術をすることになった。

手術は、食道を下から4センチほど切除し、胃を整形して、食道につなぐもので、つなぎと整形にチタンのホチキスを60数個使ってある。今後これらは体内に残ったままになる。腹部に、5本の腹腔鏡を入れ、その1本の付近を5センチほど切開して、そこからホチキスを装着する装置を挿入し、その装置と口から入れた内視鏡でホチキスを止めたそうだ。最先端の医療技術が使われたのだと思う。しかし、私は手術の間、ずっと麻酔で眠っていたので、実際にどういうことが行われたかは知らない。

手術後、消化器全体のバランスが元とは違っているため、ここに新しい落ち着きが生じるまで待たなければならない。これには、予期していた以上に時間がかかることを実感している。まず食欲がなかなか出ない。これが一番の問題

だ。食欲が出て、食べ物を十分の摂らないと、体重は増えないし、体力もつかない。味の感覚も元どおりではない。甘さは比較的早くから感じられるようになったが、塩や醤油の味は、ようやくほぼ元どおりに感じられるようになってきた。

今では日本人の2人に1人ががんにかかると言われている。80歳近くになるまで、がんにかからなかったのは幸いだった。現在の私には、食道、胃と周りのリンパ腺にもがんがないことは確かめられている。したがって、暫くは安泰なのかと思う。残りの人生をがんと付き合うことなしに過ごしたいと思う。（おわり）